



八宗
起原
釋迦實錄
二

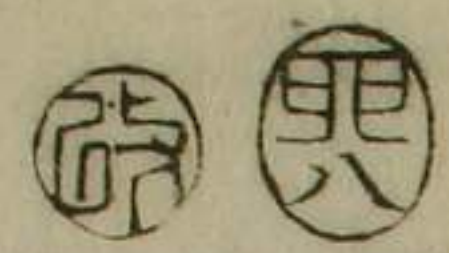
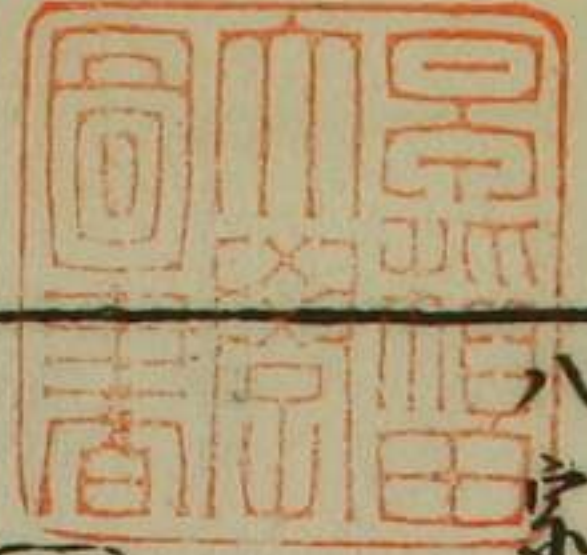
特
波13
1809
5-2



波
1809
5-2

八家起原釋迦實錄卷之貳

東都 鈴亭谷我譯述



第八 愚人軀を死して善不飯を并佛十月して臨産の論

佛母守護の諸天善神。天降て悪魔退治の身特と正しく
目前見つ。強き怪しきゆゑ。憍曇弥夫人ハさうと馬將軍
も共侶不強然として脊不汗し。惘然として言葉もある
之後面を見合して。馬將軍ハ嘆息一つ。實不著婆の
言つる如く。摩耶夫人の胎内不宿らせぬハ王子こそ尊き
佛不在さくゆ。至愚凡慮不察ひて。現不諸天の擁護ま
まを。摩耶夫人を躬まて不執念深く呪咀し。從て罪障
消滅の期あるべうと。一霎時黙してありけり。忽地腰の

釋迦實錄卷之貳



劍を抜て。自と巴頸指んとまきまき。吐嗔と強き憤懣あり。橋曇弥夫人の馬將軍の腕を會へぬひつ。何故の自教ぞと宣まふ。教をうち月成女收の浅き御心ふは是非をうちぬえね。嬖不嫉妬の悪念ふ。おん身を棄んと宣ひしと死。凍まらるるを。初らぬおわらねと。おんおの溜らぬ水あつて。烈火のどけ御んふ。凍らひ奉りて。理非邪正と。解するとも甲斐あり。と思ひしをうりり。俺きへも。俗ふり。陰囊も釣うと。おの機嫌の直うまうと。願ふ公の邪より。現在之のおん同胞あり。妹夫人のおん命を救まく計。大悪心。天孫那免るべき。神通自在の魔。仙まら。非道邪術の悪法。靨面現せうと。あつ。集集の地獄。墜し形勢と。月本親て。孰り亦度とせごらんや。今耳遠うの。後日迦毘羅城。聞えあはる。後自業

自得の罪を。誓し解し。誓うるべし。只今微臣自教して。茲不命と頌まよと死。馬將軍こそ榮利の與。不魔仙を。修して。邪法と修しつる。密計。忽地。落願して。自害せりと。披露し。おの。罪微臣一個。おわりて。夫人のうらみ。羅了まじ。然まき。遠後の大悪念の。嫉妬を深く。憤りぬひて。おん同胞。睦し和らした。他人の朝を防ぎぬ。五十年の罪とぞ知る。馬將軍が。今微臣の一言。努々忘まらるる。先罪と悔て。悪心を。翻へし。善知。激實。おの死ぬ時。不其鳴聲いと。哀しく。人の死ぬ時。い言。善くも。思ふ限と。うた遺ま。教戒いとも。切あま。橋曇弥夫人も。今さうと。類。り。不後悔し。ぬひつ。夏売をめて。夏と煮る。浅まら。奉止と。自己慚愧ひぬひて。落涙のり。先り。今ま。ハ善。悪。應

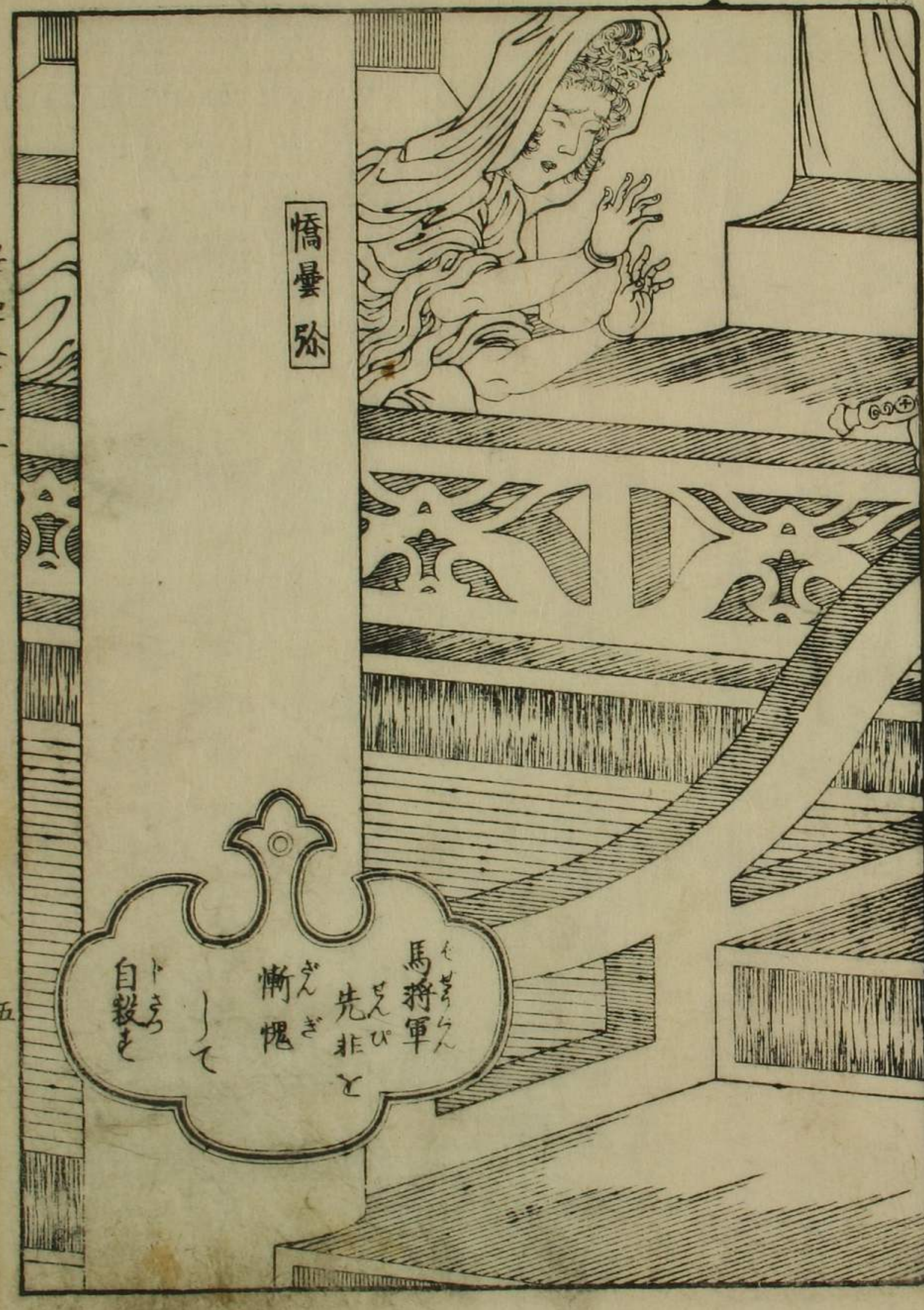
地ふ後世を吊ふさくゝるさけ無き彼才の果と傷らぬひ
 追福供養を密々ふ。能行せぬひたり。余はハ魔仙の脱
 死しより。馬將軍慚愧して。壽を捨て。煉し由へ。小橋曇
 弥夫人が嬖妬の悪念。南て解てハ都小。先那と悔て妹
 摩耶の安全を祈り由ふ。大善女と成り。ハ。摩耶夫人
 の病癒も。漸く小愈あひて。平生より。快く。清亮しく
 成せぬ。ハ。都てハ。聽て十月。小満ハ。平齊あるべし。と。淨服
 王の歡喜あふ。こと。限りもれく。朝廷の群臣安堵して。悟こ
 むぬ者ハ。無し。是都。摩耶夫人を。諸天善神守護し
 むひて。惡と懲し。ぬひし。故あり。如斯擁護のあり故。十月
 小満て。終至くも。太子降誕す。く。けると。倍小橋曇
 嬖妬の與。小。魔道師が。咒詛所の。磐石を。明の。邪法とめて。

日月の光りと。覆ひ。天血。安。池血。安。内。傳外。傳の。法と。り。摩耶
 夫人が。胎内の。太子。出世の。門を。塞ぎ。疾。出づ。き。路。あた。故。ふ。二年が
 間。胎内を。ぬ。ぬ。え。ざる。由。ふ。り。く。ども。开。の。甚。し。た。志。役。あり。若。余。も
 わ。く。ハ。異常。あり。十月。の。う。つ。を。二年。二月。母。胎。と。大。く。苦。む。る。
 未。生。以。糸。の。不。孝。子。あり。豈。然。乎。々。々。妖。ハ。德。小。勝。む。と。いつ。り。
 借。使。聊。の。邪。魅。あり。とも。邪。佛。德。を。覆。ぶ。き。妖。婦。橋。曇。弥。が
 惡。念。消。滅。の。期。を。俟。ぬ。由。あ。ま。き。ども。斯。て。ハ。妖。婦。と。化。成。せん
 為。ふ。母。が。多。目。の。苦。し。こと。思。え。ざる。小。似。て。佛。德。汚。し。且。初
 護。明。大。士。母。胎。小。降。り。ぬ。ひ。時。隨。從。の。諸。天。善。神。摩。耶。夫
 人。を。礼。拜。して。佛。母。の。難。を。除。き。守。護。せん。と。思。ひ。ぬ。言。有
 る。あ。が。く。摩。道。師。小。咒。ひ。ま。て。夫人。の。酷。く。惱。る。と。知。る。む。自。小
 過。ぬ。ひ。ハ。橋。曇。弥。が。妖。心。の。如。火。と。熾。ふ。せ。と。思。ひ。ぬ。

馬將軍



橋曼弥



馬將軍
先非と
慚愧
自殺を
して

神念あり有るべけれど是亦諸神の威神力。妊婦の思念と
 摩道師が邪術の修法不及ざる如けん。湛る事より佛して
 母の命を救ふきと。隸する者も出きよらん。尊佛の原母夫人が
 前世の功德廣大ゆへ。人間界と脱をぬひて。其魂天に昇る
 べき。壽數を豫て知り居て。其胎内不降りぬ。十月満て
 生るる。後七日あり。胎母の産ぬひし。切利天の福相
 を受ぬひしあり。尊佛の過あり。余もバ尊佛十月不
 して。正しく生ぬひし奉る。善曜經ふ。女子満十月已臨産之
 時。云々とあり。是人界常理十月ありて生ぬひし。と明けし。
 後不世尊の遺體。羅睺羅尊者が母胎に六年在り。とたは
 是前世の宿因あるも。其妊娠を成せる。十月のうへを過
 ぎまば。母子他不繋り。と。六年母を苦め。思ふも保ふも
 氣孕歎。猶考無ふ有ねど。理と寃めて。妙を失ふ。理外の理不
 佳境ありあん

第九 佛母夢不因果と知ぬ。并相師們吉夢と判む
 再説佛母摩耶夫人の。諸天善神の守護よりて。惡靈障碍
 退散しつる。其身の斯くも知しめさねど。勞患漸々不癒て。
 甘露を服しぬひし。最やく在せし。一。音信絶し。婦
 夫人より。此程の消息とりて。日毎不訪も問ぬ。祇を毫も
 まさる。バ。原來姉君不隔心ありて。妾を嫉むぬひし。あんと
 沙汰しつる。由もなき。善呪の倭言。薄情。くりきと。歎息
 あり。猶姉夫人を尊て。姉妹睦まぬ。復し。一夜摩耶
 夫人の胎内より。光明赫奕照しつ。異香馥郁と黄りし。が。
 嚮の夢不示現しぬひし。菩薩の玉の。と。た。嬰児と。法ぬひて。

再説佛母摩耶夫人の。諸天善神の守護よりて。惡靈障碍
 退散しつる。其身の斯くも知しめさねど。勞患漸々不癒て。
 甘露を服しぬひし。最やく在せし。一。音信絶し。婦
 夫人より。此程の消息とりて。日毎不訪も問ぬ。祇を毫も
 まさる。バ。原來姉君不隔心ありて。妾を嫉むぬひし。あんと
 沙汰しつる。由もなき。善呪の倭言。薄情。くりきと。歎息
 あり。猶姉夫人を尊て。姉妹睦まぬ。復し。一夜摩耶
 夫人の胎内より。光明赫奕照しつ。異香馥郁と黄りし。が。
 嚮の夢不示現しぬひし。菩薩の玉の。と。た。嬰児と。法ぬひて。

乳房の間より現はる。夫人を礼拝しあひつ。母及よ所あひ
 ね。丸が清腹ふりより。幾作のおん苦惱を受ぬ。最悪し
 抑丸とおん身と。前世の善因亦まとも。淨身と姉君。憐曇
 夫人ハ七百生の悪因ありて。現在不同胞の姉妹と俱ふ。ま
 ぬひあが。過去の戒行。修美き故。おん身ハ王の寵愛厚
 周位の悪行深き故。姉夫人ハ寵愛薄し。之や深き悪因の
 然。むす所あり。此をりて。姉夫人ハ。嫉妬の毒念熾ある。
 嗔恚の却火。不其身の。淨身を呪を。魔仙と燒馬將
 軍の壽を。悪業ま。深く成り。魔仙ハ自業自
 得。悪を懲む。佛力ハ。八變泥犁。墜し。馬將軍ハ
 罪を悔て。性の善。歸し。一心。脱。成。佛。せり。遠。切。徳。りて
 姉夫人の惡念。忽地。消滅し。大善女と成。ぬ。茲。不。至。りて

姉妹ハ惡業因ハ稍絶て。佛果と得。ぬ。淨身の與ふ。今ハ。や
 障礙も。盡る。今更由と。知。ぬ。姉君と。恨。む。一時の
 嗔恚。不。俱。眠。却。の。善。根。を。燒。棄。て。人。と。け。ま。甲。斐。あ。ら。ド
 夫人。界。不。三。福。あり。萬物の靈。う。り。人。と。け。ま。一。箇。の。福
 その人倫の中。あ。り。萬の事の道理。も。知。る。身。と。成。二。箇。の。福
 亦。能。その。深。理。を。知。る。是。三。の。福。あり。遠。三。福。ハ。十。定。の。定。と。も
 守。る。不。あり。其。一。ハ。身。尊。く。と。も。賤。き。と。捨。る。と。あ。り。其。二。ハ。身。智
 わり。と。も。愚。ある。と。捨。る。と。盡。く。其。三。ハ。身。道。を。修。し。て。惡。人。と
 殺。と。あ。り。其。四。ハ。身。富。て。貪。き。と。捨。る。事。あ。り。其。五。ハ。身。盛。ん
 る。ま。ご。も。善。し。と。捨。る。事。あ。り。其。六。ハ。身。備。て。恨。つ。と
 捨。る。と。れ。く。其。七。ハ。身。裁。り。て。憍。と。捨。る。と。盡。く。其。八。ハ。身
 円。ふ。し。て。閑。と。捨。る。と。盡。く。其。九。ハ。身。明。り。て。暗。と。捨。る

事無其十八因果の縁を知て。他とも眼べくくむ。是を国土の
 十周とつり。遠旋を知りて。若し者ハ。所憫人面獸心あり。けしき
 るぐ。畜生道不。墮落し。さる不異あり。む。都て因果の理に
 悟く。さる。他とも自を。根て。掩り。累。閻地獄の街。不遂ひ
 侍るあり。愛因果との。つ。婦女子ハ。思。た事。さる。余
 の。小。と。思。ふ。べ。り。さ。ど。因。ハ。因。果。ハ。果。あり。世。の。中。の。萬。の。事。不
 必。む。威。因。果。あり。因。ハ。縁。あり。果。ハ。菓。あり。本。の。根。の。因。あり。さ。る。ば
 是。と。呈。ト。實。と。結。の。果。あり。さ。る。ど。壁。ハ。悪。人。あり。て。人。の。物。と
 盜。も。我。物。と。爲。ハ。因。あり。緯。立。地。不。取。さ。て。竟。不。刑。ら。る。ハ。果。之。
 是。惡。の。因。果。と。り。さ。る。く。亦。善。人。あり。て。仁。慈。深。く。他。と。恤。む。因。有。ハ
 天。是。不。幸。い。さ。る。其。身。不。福。と。受。る。ハ。果。あり。是。善。の。因。果。と。り
 べ。一。是。世。の。因。と。知。り。ま。く。欲。さ。る。今。せ。さ。る。受。る。所。の。貧。富。災。賊

是。不。して。前。世。の。因。を。今。生。で。果。さ。る。後。世。の。果。と。知。り。ま。く。欲。さ。る。
 さ。る。今。生。あり。行。ふ。所。の。善。惡。邪。正。を。推。て。知。る。べ。一。現。在。の。因。と
 後。世。で。果。さ。る。余。さ。る。善。根。ハ。善。因。あり。善。種。と。植。ま。る。善。實
 を。得。種。ハ。因。あり。實。ハ。果。あり。果。と。種。さ。る。本。と。生。ト。終。子。を
 時。ハ。種。生。む。上。田。と。り。さ。る。も。終。子。と。終。て。本。と。得。と。能。べ。く。さ
 る。下。田。と。り。さ。る。も。本。と。時。て。其。種。終。子。あり。滅。べ。く。は。善
 惡。とも。不。自。種。て。自。是。と。得。り。の。あり。然。る。不。世。の。人。態。不。惡
 行。と。り。幸。福。と。得。ま。く。欲。さ。る。終。子。を。終。て。本。と。滅。さ。る。ま
 計。が。さ。る。寔。不。是。愚。あり。む。や。只。遠。因。果。の。理。と。悟。ら。ば。唯。さ
 怨。も。孰。と。り。惡。ま。ん。初。の。世。不。け。と。稟。て。涯。あり。命。數。を。喜
 怒。哀。樂。不。觸。沈。も。愛。着。の。道。不。辟。さ。る。或。ハ。名。と。集。利。を
 貪。り。他。不。負。ト。と。畢。ひ。つ。一。事。作。善。の。行。ひ。あり。後。世。の

嘗もせで空しくも世を送こそ浅狭しけ色此や且の霜夕の
 露と消ぬべき人の命ある。無常を親せぬ遂ひの今母君の
 尊き工。轉輪王の妃不きく。金殿玉樹小傳くは綿繡羅
 綾不纏つるあふ。棠花も鶯是冬の日の影よりも散果るくて。
 生者必滅の理不。閻浮の塵と減ぬらん。然バ愛着の絆と形。
 一心不佛果と願ひ。無為の快樂と極ぬあひね。丸もた月滿
 ぬまば。降使の目遠くくむ。あたまを淨身と致くまくと。最懇
 切小因果應報の理を彼法しあひ。且迎日不降使の義とさく
 示しあひて。頼て亦母夫人の乳房と分て同く。胎内へつせ
 ぬふ小ぞ。摩耶夫人の陰波惜さふ。今暮時俟せぬと。留め
 ぬふ淨聲ふ。愕然くして發覺まば。綿帳の内不在し。まて。暫
 寐ぬひし。夢あぞありりる。夫人の夢の始終を。熟思しつげぬふ。

敢て忘るぬふと。盡く。一向てふ暗記しあへ。猶胎内の王子
 尊くも。亦奇事不思ひあひつ。其後日淨飯王の折しも臨幸
 ありりまば。昨夜王子の現まあひて。因果の理と降使の迫き
 を示しあひりる。由と信ぬども。姉夫人が嫉妬の事。いふ
 たうりも漏しぬまを。開の橋曼弥夫人の心中と斯くと王の
 知ろし。召さる。跡まて。愛しあひぬの。罪科の得も計らまを
 を。況て今ハ善心不。歸すあひし。姉夫人の舊た罪を筆て
 漏さん。今まは其の。遺り盡く。暗不記あひし。隨ふ。如お々々
 と熟ぬひて。正しく示現まし。ほせし。王子の逆せ。遠うくまを。
 妾ハ今日より。とり別て。身と清め侍らんと。妾しあへ。淨飯
 王も。奇夢と睿感まし。夫人の意不終しあひつ。思ふ不覺
 の夢想といひ。听が。たの正しくも。菩薩の降使由し。まを。

あふ人。朕も宜しく慎みて。阿娘が行ひし隨ひあんと尊敬
 深くも宣ひて。此よりハ摩耶夫人とおん母の姉君のてくふ
 思ひぬひつ。故て慈想の膺心の落むりも在りまきむ余
 夫人の示現の隨ふおん身と深く慎むぬひ。原素三毒ハ一の巻在り
 ばさねど。ハ禁清淨の。救世せむ。偷盜せむ。姦淫せむ。妄語せむ。酒のまじ
 齊して。六波羅密を修りぬ。是威清淨道に故のおん齊戒と
 承りて。烏將軍夫婦懐びつ。心を副てを冊きける。淨版王ハ
 夢想の示現と疑ひぬ。おん有ねども。除り不奇異思ひぬ。ひて。
 夫人の身のうへ胎内の王子の吉凶争何そと。計辭ぬひりぬ。
 夢の占と為せむと由と報命ありける。おん觀相不堪能ある。
 婆羅門の相者數十人。做不應して青龍珠の玉殿不奈内
 して。天の做せる美人ぞと聞し。不勝る摩耶夫人が固色王貌と

相し。まろふ。威淺ま。た凡夫心恍惚として。一回ハ醉るがてく
 成けるも。稍已と思ひ返して。懇と觀相しつ。最初のおん夢想と
 考合を不寔不是善表ありと。相師們各々衆議して。おん夢
 の判を記す。其文不曰
 若母人夢見日天入右脇所生子必作轉輪王
 若見月天入右脇所生子諸王中最勝若見白
 象入右脇三界無極尊能利諸衆生怨親悉平
 等度脱千萬衆於深煩惱海
 是を淨版王不捧まつりて。恭しく演る。后妃の玉相と稟
 おん若夢と。勤考し奉る。不。高德天地不等し。りるべき。王子
 所平産不候えん。と相師們齊一奏聞しぬ。ま。王ハ深く
 歡喜ぬひて。相者們不多く財を賜ひ。遠折り。著婆大長

ふも金根須臾若干不莊園多く賜たりて俱不暇を賜
ひしより。暮婆ハ其頃日支国ハ活人草ありと聞しりハ
わてき遠珠草を採て普く人命を救をやと己が国王ハ
聞え上て長途を厭ハて數萬里隔てし日支国へぞ旅行
ける。柳遠活人草ハ死せし不回をハ勿論常ハ一度服され
を病悩ハ忘しし。劍戟も軀を傷らざと。述異記ハ識し
しり。余もハ其後年と経て暮婆ハ僅一莖一實と猶採得て
歸国しつ。菜園ハ之を種て多く人命を救ひしが人公天ハ
救ける時ハ後ハ遠種絶果て日支国ハも今ハ無しとぞ
最惜りりる菜草ある哉

第十

花濟堂を造る濫觴并悉多を子降誕
轉輪王代々の樂所ある益毘尼園と聞えしハ。度き池蒼海

のく。然も連鱗ハ似て亦渺々しるハ獲のく。金剛石或ハ
水精或ハ吹瑠璃とりて積重ねねし。築山処々ハあり。波須弥
山ある岡浮樹より。落る露ととせ不貴珠。岡浮檀金と砂
利不蔭り。鶴ハ汀渚ハ嘴と鳴して千歳の壽を娛し。龜ハ
岩根ハ尾と伸して。萬世の齡を保つ。萬国の奇樹異草と
種々の珍花を呈して。十雨ハ沾ひ五風ハ戰ぐ。就中園中ハ
隨一の名木しる。無憂樹ハ今と盛の花の色香と儂可ハ孔
雀舞頻伽喇了。現ハ仙鏡の風色景致其中央ハ清滝殿
あり。土木の精工善美を尽して。楊閣高く回廊長く庭棟ハ
聳て夏山のく。勾欄衡りて春庭のく。碼碯の礎珊瑚の
板。七宝八珠延満して。極樂天堂の宮造も斯やと思ふをり
あり。余もハ遠益毘尼苑ある。無憂樹の盛る頃ハ花の宴を

催して君臣樂々と俱ふ一つ。春平と唱つた。と。年毎の恒
 例ありふ。と。津阪王の摩耶夫人の所勞令く愈あひふ。
 摩耶と安んじあひ一拘り。四月の初ふあり。く。件の無
 憂樹燭燭する。花の盛を僥倖ふ。例の大燕を催して摩耶
 の心を慰めむやと。勅命ありり。ふ。と。近臣宣旨と奉りて
 青龍城の傳官する。馬將軍へ傳へり。と。摩耶夫人臨び
 ぬ。領事の旨腹で。回奏しあひり。依て月景。波梨舍那。並
 那離の三宮と。と。後宮の女官。月卿雲客へ。當八日。益
 毘尼園ふ。花の宴を催す。ふ。各系集ま。た。と。
 残り方。詔令ありて。俄に。毘尼園を灑掃し。清滝
 殿と莊嚴を。有司們。遠小。勵。つ。所幸の營を。做。不。早
 く。當日ふ。あり。られ。圓の兵士十萬餘り。苑の四方と。警護

瓔珞者西域
 記云在頭曰
 瓔在身曰珞
 花鬘亦西域
 女子首飾也
 云云今本邦
 僧侶以其形
 用佛具

て。專非常の備と。願中ふ。年二十才。前後あり。才色
 勝。ま。と。梅女一千人。指。と。管侍の役。と。赤容顏美
 麗の童女千人。身材長。と。瓔珞彩衣と着せて。
 香華を挑し。殿の中央に。津阪王の玉の牀。左に。摩耶
 夫人の坐。其次。芙蓉夫人の坐。右に。憍曇弥夫人の坐。その
 次。好容夫人の坐。と。次第正しく。設。今。不。王。と。南。め
 四。殿の后妃。今日を。と。粧装を。一。備の玉座。着
 ぬ。三光の大臣より。月卿雲客冠を。双。袖。と。連。羅。列
 つ。梵天王。も。君の威徳。と。且。憎くも
 四。夫人の。を。見。も。竹。も。絶世の美人。不在。せ。別
 て。摩耶夫人。に。天。の美。不在。心を用ひぬ。ひ
 ぬ。粧装。是。首。七。室の。を。冠と

戴き身みの羅綾綿繡を纏ひ。瑠の飾服と驚くを。玉
 の帯真珠の裾。文も餘る。髪への溜橋を暢らう。くもて
 雪の顔面丹花の唇。緑の眉曼くして。国色。嬌嬌うる光
 景へ。将小柳の容みして。桜の花の累色と巧み。梅花の香り
 わさるごとく。花鬘の光輝。律衣の上。美色。四下羞明き如
 菩薩ふ。向よるもの。已を忘れて。用き。はを。用もせむ。懔然うる
 も多うりけり。浩き。三殿の后妃と南。三千の女官も。忽地ふ
 顔色を失ひて。満月の影。小衆星の光を奪ひ。き。不異る
 ね。情曇。弥夫人も輝く。むりの。摩耶夫人が面を見て。實ふ
 麗り。き。姿よと。思。つ。専姉あうも。其。身と。卑下。ま。心と
 淡て。嚮。不。遠。り。一。嫉妬の罪の。そ。恐。ろ。く。浅。様。く。純。き
 心と。百。千。扁。密。小。悔。と。あ。あ。る。べ。し。余。る。程。小。管。侍。の。嫁。女

童女。衆人。く。ま。み。く。山。海。の。深。味。を。盛。る。珠。玉。の。杯。盤。を。捧
 本。座。授。ま。や。宴。振。お。ま。王。の。龍。顔。麗。く。お。ん。觴。を。奉
 む。ひ。て。先。摩。耶。夫。人。小。賜。ひ。て。より。献。酬。交。あ。る。程。ふ。伶。人
 舞。樂。を。舞。奏。て。清。遊。の。興。を。添。了。ふ。ぞ。君。臣。深。く。欣。喜。ふ
 入。て。娯。樂。限。り。も。无。う。り。け。る。浩。き。王。の。清。觴。の。教。と。重。ね
 む。ひ。つ。醉。ふ。衆。ト。て。宣。ふ。や。う。這。藍。毘。尼。園。中。小。集。め。種
 う。る。珠。草。弄。木。と。一。朵。う。り。た。根。小。の。折。採。と。と。禁。む。ま。ど。も。今。日。の
 摩。耶。が。意。と。慰。む。忘。憂。の。慈。小。わ。ま。さ。ば。垂。憂。樹。を。除。く。の。宣。の
 所。有。草。木。の。花。の。柯。を。各。一。枝。づ。折。把。て。摩。耶。の。前。へ。挿。り。て
 来。べ。し。情。摩。耶。の。开。が。仲。小。意。不。可。ひ。一。花。わ。ら。ば。會。て。是。を
 挿。小。挿。べ。し。其。花。の。折。主。小。の。多。く。の。被。お。を。領。せ。んと。教。多。の
 宮。女。小。命。せ。ぬ。へ。女。官。們。奉。り。て。收。び。つ。む。わ。ら。は。后。妃。の

藍毘
 尼苑ニエン
 摩耶夫人マヤノキド
 無憂樹ムウウツを
 手折テオリ



摩耶夫人



清意ふ可ふ花こそ折得めと大家廣き園を巡りて億兆の
 草木ふ咲満つる花の枝を思々ふも折つ。花籠ふ挿て茶
 一々摩耶夫人ふを捧ける是る我
 皇国あり。諸寺院佛せ會を營ふ。院佛の龕の屋棟と草
 花りて是と葺。花清堂と稱る。則此時の遺風あり。徳て酒
 宴ハ猶盛ふ。良酬ふ逮び一時。淳成王ハ猶も亦摩耶夫人ふ
 對ひぬひ。おん身も願くハ骨と厭ひ。花中第一の珠花を疊
 樹と一枝折て眼ふ賜へ。命なくハ摩耶夫人ハ敬て承る。王
 王の封を犯ぬひて。垂憂樹の下ふ近りぬふ。奇あるか。這
 折しも。靈香四方ふ薫ると。人咸萬花の白ひと。亦煙々も
 せざり。が。軀て夫人ハ垂憂樹の花の朶と折採る。と。織々
 つる右の玉臍を。か。伸しぬ。忽地おん衣の右の脇と

撥用きて突然と。王子降誕しぬ。ひたり。當下地より車輪の
 ごと。青蓮華せと。志上ふ。太子ハ産を隨ぬ。是をむらり
 君長侍女ハ。齊一邊り。走り寄る。王子のおん身より。金色
 の。大光明と放ちて。普くも。三千大千世界ハ。照る。照る。照る。
 程あるふぞ。射眼さふ。堪終て。遠巡し。つ思を。天う。仰げハ
 虚空あり。四天王天。繡をりて。宝几ハ置。帝釋天ハ。蓋を。梵
 天王ハ。白拂を。執ぬひて。其方右ふ。立ぬ。ハ。旃陀。優婆塞。旃陀の
 龍王ハ。足着。金色二脚を。現りて。たよりハ。温水と。吐き。右よりハ
 冷水と。吐て。清淨切徳の。雨と。降し。王子のおん頂より。漂流し
 つ。諸の不淨と。去る。諸天。諸菩薩。降しぬ。妙華を
 散し。妓樂を。奏て。王子を。敬礼しぬ。帝釋梵王。四天
 王。二龍と。共ふ。亦。翠天。昇ぬ。王子ハ。軀て。青蓮華の

臺より下りぬひて、獨自前へ二足、後へ四足歩らぬひつたも
不天と指しぬひ。左より地を指しぬひ。微妙の初聲と發し
ぬひて、四維上下唯我獨尊と。師子吼しぬひ。都尊い哉後ふ
無上道を成しぬひて、釋迦牟尼如來と稱し奉る。這王子
ふぞ在しける。念をば御母摩耶夫人へ。露をうりも苦惱る。く
取小王子を産ぬひて。心禪定入る。無生法忍の形と
收めて。無憂樹の下不安居ぬひ。傍より我然として。深き靈
泉湧出。其水いとも温あり。佛の奇特小衆人の驚怖て
もぬ出。得ざると。憍曇弥夫人の傳の女官們小念トぬひ
て。佛の温靈水りて。摩耶夫人のおん身と清淨小潔ハ一に
鳥將軍の神の禰禰小。王子を纏ひ奉り。界殿して淨版王
の。磨質不入を奉る。王ハ方僅眼前小。不測の奇現と見

あふて。何と分より在しぬひ。母子の恙なきと。他事なく
念トぬひ。最健ふも玉の如き。王子の容貌を爾して。大
ひ小歡喜ぬひ。殿上殿下の諸人も。執り收び勇まさん
や。威萬歳を唱へ。慶賀しまりぬ。當下王ハ鳥將軍小念ト
ぬひて。摩耶夫人と鬘小。念まのせ。青龍城へ還させぬひつ
王子ハ憍曇弥夫人小抱りせて。俱小盤毘尼園と立出ぬ。ハ
女官および百司百官。前後左右小侍奉り奉りて。非常と驚
圓兵士們。整々と圓う。路と徐行て。王宮へ還濟し
奉りける

十一

灌佛諸香湯の方并 佛生日異説の辨
今本邦毎歲四月八月。諸寺院小於て。釋迦の誕生會と當む。ハ
花濟堂を。造りて。其中小佛像を安置し。諸香湯を。改

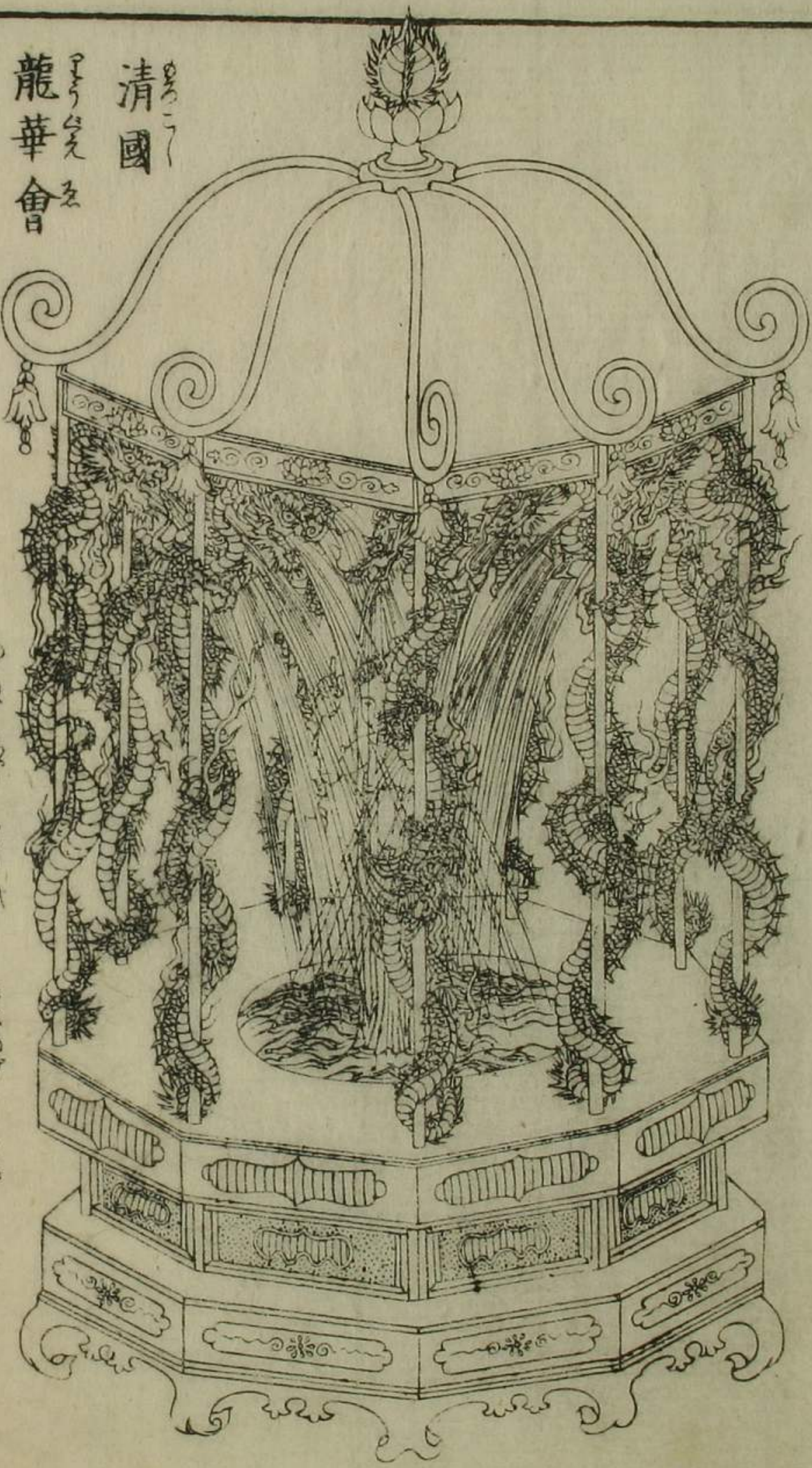
灌ぎ奉るハ正小王子降誕の瑞應を表せり也。人皇三十四代
 推古天皇の御宇。始て灌佛の龍華會行り。禁中不於て
 其儀式あり。正安殿不凶形と造り。佛池の收を極。五色の線と
 り。草木の花と結び。玉簾を掛。案と北の方子置
 金網とり。他。五寸六歩の池に佛を。黄金の萍の中。小
 立。ま。衆僧修法了り。天皇親五色小分ち。小
 五祥ある五香水。俗間。り。三度佛跡を。禮と作。り。小
 次小親王及び宮妃大臣階位の品。隨て。順。佛。奉る
 遠會と。時。人咸界外の大道。趣き。疲神退去。て。因。小
 災。今。満寺院。行。修法。世の人。年。毎。奉。り。て
 眼前。奉る。千歳薬。多く。甘草。雲脚。を。用。む。
 奉。方。ハ。牛頭。旃檀。紫檀。多摩羅。香。松。

- 芍薬 白檀 鬱金 龍腦 沈香
- 麝香 丁香 以上

この香種類を。灌ぎ奉る。つたあり。禁中。佛。灌ぎ
 の。五香水。都。架。香。り。青色水。附。香。を。りて
 黄色水。將。金。香。を。りて。赤色水。五。降。香。りて。白
 色水。安息香。を。りて。黒色水。備。亦。佛。法。歸。依。の。人。ハ
 佛。生。會。小。香。諸。自。甘。茶。を。佛。解。小。灌。ぎ。奉。り。時。此。偈。と
 誦。我。今。灌。浴。諸。如。來。淨。智。功。德。莊。嚴。聚。五。濁。衆。生。令
 離。垢。願。證。如。來。淨。法。身。亦。燒。香。一。つ。合。掌。一。て。戒。定。慧。解。知
 見。香。遍。十。方。刹。常。芬。馥。願。此。香。雲。亦。如。是。無。量。無。邊。作。佛
 事。亦。願。三。塗。苦。輪。息。悉。令。除。熱。得。清。涼。皆。發。無。上。菩。提。心
 永。出。愛。河。登。彼。岸。唱。一。つ。惡。心。消。除。一。て。念。一。ま。る。是。ハ。作。善

九條竜亭

この清俗紀聞に見えり



清國
龍華會
灌佛之圖

○千歳菓を龍尾より吸上げて口中より吐き廻環て濁さるの仕掛あり

○右の圖ハ當世清國の諸寺院少く佛生日小其堂中一設了所の誕生佛あり 皇國の花御堂小相同一余まども其形ち至り盡して甚奇觀小過さるハ推量小俗あゝん欣開ハ左もあま右もあま世小三寶皈依の人最多きとハ和漢とも小異あゝぬと知るべたの

○佛生會と龍華會と稱するハ往古龍華樹 菩提樹の下にて弥勒菩薩始て正覺を成しぬハ三度説法ありより當來弥勒小逢奉了結縁として佛生日も亦龍華會といふありけり

清俗紀聞

○四月八日釋迦佛誕日あり寺々九條竜亭を堂中小後け竜亭の月あハ盆と居白檀あり刻了釋迦の立像と置右九條の竜はより香水と坐坐佛躰小灌ぐ恒持ありび小大衆等笛と吹鈴を鳴し小鼓雲羅等と打樂と奏し佛事と行ふ故小諸人泰詣多し以上

佛生日也
古畧曰當周
昭王九年甲
寅之四月八日
云以這說考
年數佛在世
七十九年租
合減度歲茲
者優周書異
記之說而識
之猶考

信心の切徳不依て、今今けあての幸福多く、来世の天堂極楽へ生
るゝと疑ひ無し。既し世尊の教ぬひし、尊た教諭多し、あは
ども本編諸教限りのあは、文解くして紀を、能つて着官檀
那寺の住持不同べし。實や教法二国不傳來して、千歳の後
まうせも、衆生と濟度しあふある。終迦文佛の尊たし、あは
光明と放ちて、大千世界を照しぬひしと云。あふ不現り、役けぬ
虚説少くあは、中華周の昭王二十四年四月八日、山川震動
して、五色の光西不現たり。左支獲由奏して曰、西方は大聖人
ぬひしあり。一千歳の後、其教此国不及をんとし、是を子使生
の自あり、數萬里の遠き中華まで、其光の現つて、あは、大光明
推て知るべし。佛の生る日、二月八日と云、論なり、其故を
論了、小周の時、子の月と云、歳の首と云、是は今の十月、正月

あり。是を、周の昭王二十四年、四月八日、卯の月あり。迺是二月
ありと。昔と今と建支の違ひしと考へむ。猶四月と云、佛生
會と當むの謬歟。云々と云、論し、去説あり。是は、佛生るに
槃會も亦當ふ十一月十五日ありと云れども、經文不據、然るも
涅槃の説、佛世尊が滅度の條、不終し、り世尊世も在せし、
周の昭王、穆王の代、不當を、事と中華の年月、撮合し、り
鄭のどした。四月二月の異説あり。畢竟子の月と正月と定むも
中華の法ありて、天竺の制あり、昔天竺の經卷、漢の永平
年中始て、中国不傳して、翻譯せし、書つて、せし、た、數回衆議と
して、周の世と天竺と、建支を、深く考へて、年月と合し、て、
那、覺束、た説を、設けん。周の年月、あは、當を、ども、時候、の全、く、
月と、歳首と、為し、去夏、正不、從ひ、翻譯者、の定し、あは、今の

四月八日不嘗む。佛生會入。謂あまを寅の月を歳の首とせしむ。
 周より二代の帝あり。禹王国と夏と号して。寅の月を以歳首と
 名ゆふ。是を人正といひ。夏正といひ。其後周の代より。遠りて子をりて
 正月と定し。周滅びて。亦夏正を用ひしより。本邦まで。其
 建支不燬ひて。孔子も夏の時を行つと。顔回も宣ひつ。余もこ
 周正ハ用むるして。夏正不依て定する。佛生日ハ當代の四月
 八日あり。と明らけし。慈鎮和尚の歌も。

百敷の賀茂の淨形の志めの内不仏の身とも猶勝くうま
 加茂の淨形。山法因愛宕那不鎮。在まじ。加茂別雷皇
 右神宮の祭あり。毎歲四月酉の日。其祭日。番跡の石上。不て
 神奉り。淨形と号し。神代不玉依姫の別雷神と生ぬひし
 所ありとぞ。

十二 摩耶夫人薨去并 眞宗火葬を行ふ始

太子降誕不二十の瑞應
 四の瑞と云ふも。三十三の普曜經より。三十三の
 男子を産。及其麻の馬。意く弱を生む。何れ威色色純白。一
 て。發蹄珠と貫けり。別て迦毘羅城。不生く。麻の弱珠絶る。まへ
 名を健勝と号く。余る。得る淨版王ハ。聖日群后。嫁女と隨入。王
 子を將ひて。天廟の天像。小獨り。あま。奇あり。哉。奇あり。
 刻する。梵天像。坐より起て。恭しく。王子の足と礼し。多ひつ。淨版
 王より。ち向ひて。大王ハ。末ご。識ぬ。まへ。や。王子ハ。天人の中。最尊
 あり。虚空の天神。意く。礼敬せざる。者や。あす。然ると。遠く。まへ。
 て。俺を。礼させん。と。あまひて。大い。不違つ。と。宣ふ。まへ。王と。そ。と。再
 次奉り。群后。嫁女。們。然る。も。眼と。眼と。互。不見。命。との。再

同らんも有繫少て。王子と傳小抱うせり。扇の前と避さるる。天像ハ坐小着て。舊の本像小変了こころし。流了末有の奇事。わろ。天資神助の王子小在せど。淳成王ハ猶も亦擁護と深く。祈りおひて。龍駕小奉おひ。王子と與小還流をの。備も。后妃摩耶夫人ハ最安らけき。清彦の後神身。腦をの。小有ねど。河と中々氣力獨り。飲食小欲し。おこて。膏肓眠おひつ。懐内小。卧おつ。王の詹慮も安んドおひつ。余も亦橋墨弥夫人ハ。王子の與小賢明ある。乳母を指て傳りせ。其身ハ青龍。海小。作おひて。晝夜とも小病病おひつ。復回も咒咀の罪を。慙愧。後。悔しおへ。天地小おひて。妹夫人の患病平愈と祈りおひ。丹誠を尽し。おへど。定業あるを。其甲斐あるも。ち子けし。おひ。一日より。七日をぬる。曉小摩耶夫人ハ。姉后と傳。鳥將軍。

夫婦との。枕の邊小抱きおひて。自宿世の戒行。作美く。深も。大王の寵と蒙り。人々小尊敬せし。是て。所有娛樂と極し。く。王子とさく。壽奉りし。此上あき幸福小侍し。既小。現世の縁ハ尽し。盡方の都ハ。飯り侍と。一念不生の心。小。迷も。憂惱も。なく。煩惱即菩提。生死即涅槃。と。欣聽。さる。憎し。と思ひ。愛し。と思ふ。心も。獲らね。バ。残る。氣とも。は。ぬ。り。透。莫。子。の。清。身。の。ら。の。の。姉。君。の。お。ん。慈。と。只。願。小。願。ひ。ま。つ。ん。鳥。將。軍。夫。婦。ハ。今。日。より。く。目。の。ど。く。姉。君。小。傳。き。は。一。奉。り。て。子。孫。長。あ。ひ。つ。も。不。善。お。ん。行。迹。在。ま。さ。る。ば。流。れ。正し。奉。ま。上。將。この。身。の。亡。骸。ハ。夕。陽。お。ひ。て。墓。昆。と。言。え。横。墓。小。憂。樹。と。種。さ。せ。お。と。大。王。小。養。り。て。預。奉。る。べ。し。と。遺。云。を。仰。お。ひ。つ。端。々。正。念。合。掌。し。て。膳。が。ど。く。盡。な。ひ。ぬ。橋。墨。弥。

夫人焉將軍夫婦々。慈歎悲泣り。バ更あり。宮中の女官們も。
 鳥夜不灯を失ひし。心地せしきて。法轉び。泣良む聲く。
 官殿の外まで聞えりり。余も六階老のおん契濃あり。夫人の
 薨去と聞し。ゆいゆい。津阪王の昔とをうり。不。歎き悲しむひ
 流も。同ト流しと思し。多ひて。津流し免び多く。バ。二大臣百司百
 官。後宮の女官。婦女まで。流し袖とぞ。後りけり。邪て果ぶ。死事
 あくね。津阪王のおん流し。悲ひ沈し。ぬひつ。青龍城。行幸
 わりて。后妃の亡骸と。腐覽し。苑の王願生る。ごとく。此も。容色
 愛し。ごま。愛者の念と。禁め難ひ。ひて。遠侍宮中。不。留め。ま。歎
 しく。思。石。ぬ。つども。民下の。津。奏。黙止。ごとく。其亡骸を。香木。の
 棺。不。収て。遺。云。あ。ま。青龍城の外。方。あり。夕陽。お。不。却。送。し。て。
 竟。不。香。薪。を。りて。茶。毘。し。ふ。りり。噫。名。苑。一朝。の。龍。不。散。て。夕陽

山下の夕烟と消ぬひし。ぞ哀ある。是火葬の法あり。今。本。邦
 一向宗の専行ふ所あり。抑。天竺。不。葬。法。四。あり。水葬。土葬。林葬。
 火葬等あり。皇国上古の火葬あり。其形。解と。焚。傷。ふ。と。る。し。
 廣土葬あり。安厝の。 文武天皇四年。不。道。照。和。尚。遷。化。し。を。
 弟子們。遺言。不。從。ひて。粟。系。不。火。葬。し。志。より。遠。葬。法。 皇国。不。始
 ます。是。不。次。で。大。寶。三。年。不。持。統。天皇。の。おん。亡。骸。と。死。を。周。不。火
 葬。し。ま。つ。し。ぬ。是。天子。火。葬。の。始。あり。儲。め。茶。毘。し。ま。つ。し。ぬ。と
 摩耶夫人の王骨と。七。雷。の。壺。不。納。て。昂。ち。夕。陽。お。不。埋。葬。し。盛
 毘。尼。苑。の。青。掩。殿。を。其。所。へ。引。移。し。て。十六。丈。の。宮。橋。と。建。立。し。
 廟。前。不。無。優。樹。を。移。し。植。させ。ぬ。ひ。り。後。年。佛。世。尊。成。道。て。
 因。不。還。幸。し。ぬ。ひ。し。た。遠。所。不。從。ぬ。ひ。て。摩。訶。變。耶。山。切。利。天。正
 寺。と。号。け。ぬ。ひ。ぬ。

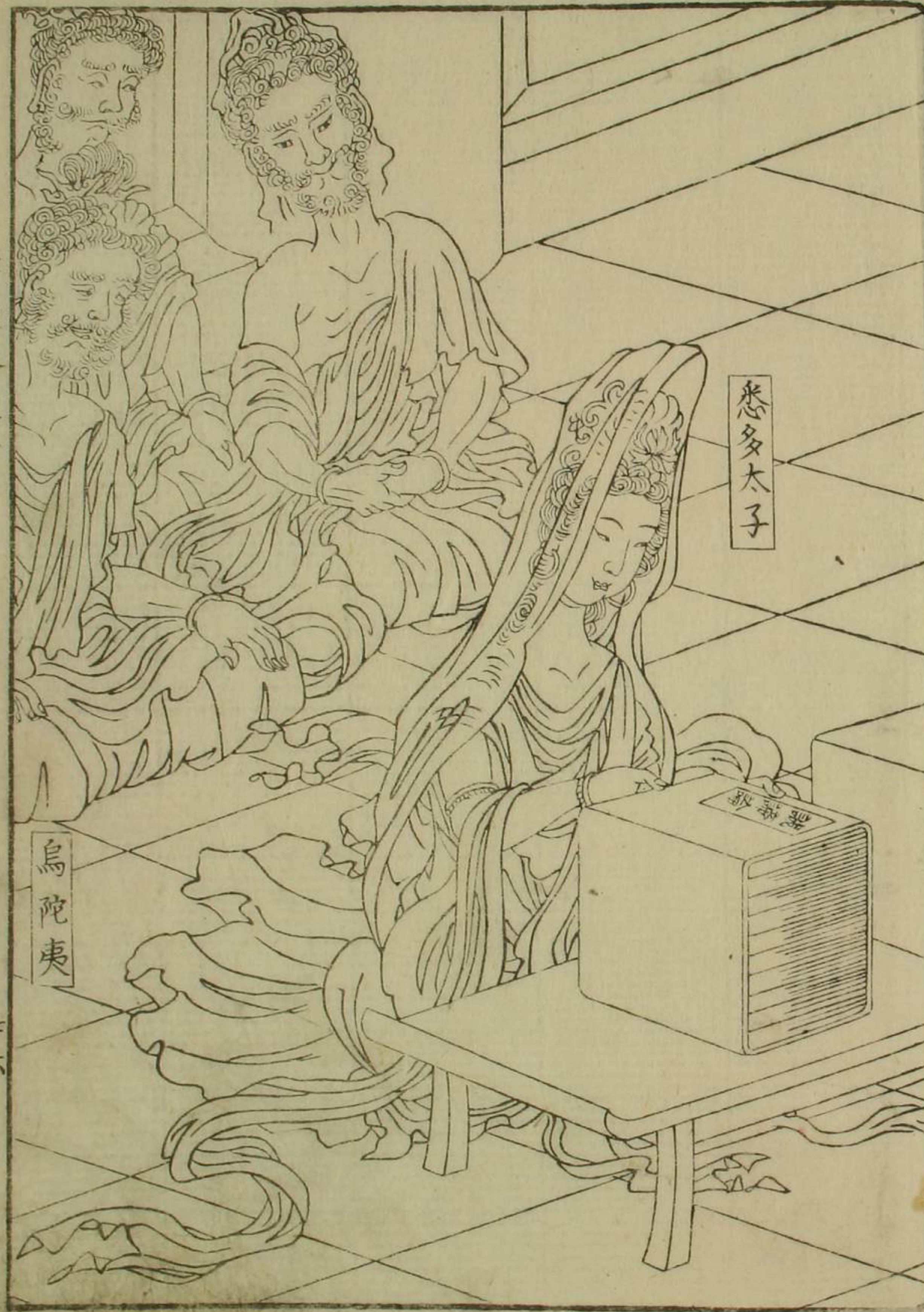
十三

悉多を子入学并 神仏相好を説示す
 却説憍曇弥夫人の太子降誕の真日より預まらる月景城
 措まのしりせしむ妹夫人の教果あくも世と早くせしむしりし。深く
 も憍不遠をゆる。嫉妬の罪を懺悔しぬひ責て太子と實子のごとく。
 慈を育てまら。罪の償ひ有べうし思ひあへば苦国を後宮の侍女
 們と俱不守育てあふ。実の母不異あはに。津阪王も太子の與不將
 種ひまの女あま数多を徴て才色優き一者とのそ。二十二名持おし新小
 太子の傳の助不加えぬあある中八人へ太子守抱一の儀行し
 八女へ太子洗浴の司し。八女の乳の司し。八女の鍼弄の相と
 一のり。清き衣裳服飾不危麗を極むしりし一と毎一人あ
 經不摩耶夫人の亮をぬひしもまご此頃と思ふ間も重く奉立て
 太子へ二才不減らひ一凡體不在しまなねば其容貌不六七歳の

童子ふも起ぬひて。清言諸おん動止天然法則不台ひ。天性の美質
 玉の像く。おん顔光暉不だ。王のおん喜悅斜あはに。文道の博士不
 轉して。太子の御名を授せぬ。博士ども奉りりて。種々不商談
 一つ太子降誕ませし時三十二の瑞應あはし諸の奇情悉く。
 遠せむとりの奉養し。周て清諱を悉多太子と。喚奉らむやと
 奏しりまは。津阪王降感す。此名朕か意不台ひ。定不可と
 宣ひて。博士不恩賞を賜ひり。是より悉多太子と稱し奉りて。諸
 人の尊敬大くあはむ。常く愛して生さぬと見す不就ても鳥將軍の
 摩耶夫人世不在さば。嘘や悦びぬらんと思ひ出て。妻と諸諱ひ。
 夫婦奇一懐旧の涙も多し。日も多し。形て年月と煙る。復太子五才不
 深あひ。其春加冠の儀あり。七歳不減らせぬ。一年より。總行礼舞
 諸般の技藝と學びぬ。一月も満む。一々思く妙術と

寔め其蓋奥と悟覚あり。師範たる者發歎して。是凡人あり在
まことと舌と巻ぬる無りけり。聖年八才小成也。ハ洋版王の右
子の與小文道と學をてき。師範を親より為るやと。群長小勅問
一あり。月郷雲容奉りて。當時博學多才ありて。善誦篇と知
るものハ。蜜多羅小とそゆと。佛本行經よりて。蜜多羅
直小蜜多羅を徴ありて。師範たるべし。有勅旋あり。儲太子と文學
修行の友と成べき。皇從子。聖光長の嫡男。鳥陀夷。今茲十三歳
ありけきども。賢明才智人小短なる。由て豫て知し。召て。俄小徴去
あり。是を。聖光太子の身小餘る。面目と布して。鳥陀夷ハ月景城
界けり。遠宅俊才の童子。皇從と十餘名。皆去して。右日良辰小蜜多
羅ハ。學堂小界あり。其行雅花くあり。玉のてく。美り。兒童男童
如百人。左右。乳母女官と共。偕小太子の輦車小隨從して。列を祀さむ

整々と。餘行前後小發固の武士あり。鳥將軍ハ後小隔間て。馬上
優小伏奉りて。最も美々し。た。為伴と。遠小望て。蜜多羅ハ。羊途
まで。出迎して。躬て。寄駕と。學堂へ。請入奉り。入學の後。武澤畢て。
先文道の楷。撰あり。筆道を交へ。奉る小。初て。毫を。親ありとも。字
形自然法小合ひ。筆力却。蜜多羅も。及むざる。と。遠く。れば。公。仲大
ひ小發。怖つ。猶も。太子の才と。試んと。世益滿。微諦論。二部の。秘書と
見せ奉りて。何より。濟意小學むんと。思召し。や。と。同奉。ま。憲多。右
子ハ。其外題を。商して。公。仲小思ひ。ひ。ひ。や。世益滿ハ。國家小益あり。
事と。載する。書あり。べし。將。統諦。篇ハ。上。求。善。撰の。書あり。と。咽
けし。九轉輪王の。位を。踐。四。天下と。威。依。を。ると。も。涯。ある。假の。世く。
緩き。生と。稟する。者あり。那。百。年。の。榮。花と。も。極。ると。ハ。能。ま。し。
柳。花。が。母。君。ハ。襁。褓。の。うち。小。薨。去。あり。て。只。半。日。の。孝。と。も。做。さ。む。



烏陀夷

悉多太子



蜜多羅

二部の
秘書を
蜜多羅
太子の
様を
試む

其汚恩と被せんふい。出家学道して母君の尊靈を慰め奉り永く
生死輪廻の界と離らしめ奉らん。孝道の端ふも成しめと聰く
も思慮と決めぬひて。密多羅小対ひぬひ。九の遠穢掃倫と学ま
欲しと仰ぬ。密多羅猶心中小嚇き。原来この君出家得道
の。清望ありけりと。有繫宏才の密多羅あまは。早くも知覚て思ふ
か。ち子勿雅ハ。ませども。世小未曾有の。身童子あり。孰う留学
志ぬ。小程ふ。出塵一ぬ。小とあ。我罪免。是疑り。あ。如。早く
宮中へ還し奉る。小いと既小深念と決し。其日。ち子之。後を別
籍小溜め。ま。せ。諸朝王宮へ。泰内して。奏。ま。や。ち子の聰明。磨
智ある。古今獨歩。小超らせぬ。自然。して。天文地理。礼別。算。数。
諸道の。理と。通曉ぬ。は。ご。と。在。ま。さ。ね。は。臣。們。が。及。不。所。不。あ。は。後。預
く。宮中へ。召。還。し。ぬ。と。乞。ふ。あ。を。津。阪。王。不。審。ぬ。ひ。留。学。未。だ。後

許あ。ぬ。小。諸道。不。達。せ。り。心。濁。む。遮。莫。密。多。羅。が。教。導。難。く。ハ
孰。と。師。範。小。任。む。べき。と。命。小。密。多。羅。惶。は。は。ち。子。の。師。と。仰。ぎ
ぬ。小。者。ハ。神。通。廣。大。と。聞。え。し。維。那。里。国。香。山。の。阿。私。陀。仙。あ。り
て。の。能。ハ。ト。大。王。遠。神。仙。と。敬。ま。へ。と。奏。聞。む。津。阪。王。點。頭。ぬ。ひ。つ
密。多。羅。小。暇。を。賜。つ。官。人。們。數。百。人。を。迎。へ。奉。り。し。月。景
憐。へ。還。させ。ぬ。小。諸。香。山。の。遠。き。と。洛。程。數。千。里。隔。ち。し。同。小。急
流。嶮。山。多。く。て。舟。未。甚。易。う。ね。誰。と。う。勅。使。小。遣。む。き。と。終。後。小
自。この。道。了。得。小。被。阿。私。陀。仙。人。ハ。數。千。里。と。隔。ち。し。香。山。小。在
ふ。ぐ。立。通。を。具。是。し。了。故。小。遙。小。王。の。意。を。知。て。雲。入。勝。て。瞬。く
間。小。迦。昆。羅。城。へ。飛。來。り。我。ハ。香。山。の。阿。私。陀。あり。と。名。告。つ。昂。然。と
宮。中。へ。拔。し。入。ぬ。と。津。阪。王。且。疾。き。且。怡。び。ぬ。ひ。と。百。官。と。俱。小。殿
上。へ。迎。へ。て。對。面。し。ぬ。小。面。ハ。専。の。熟。が。ご。と。兩。眼。早。し。り。輝。き。て

髪髻皆紫あり寔小人外の真仙と孰り尊い何ぐさるべき王も深く
 尊敬しその當下阿私陀仙の王に對ひて曩も太子降誕の時大光
 明を放ちあり大地六種不動一故に香山の遠近不在ども大聖出
 現せりと預て知覺ゆひぬ今亦老朽の王とて大王も奉一志
 是密多羅が一時の方便老朽も太子と相りて大王も告奉る
 輝の必ありあるべし太子不見奉奉らんと稟せ六淨版王治あり
 直小阿私陀仙を拜ひみひて月景城一行幸あり情曇弥夫人那と
 聞て悉多太子と連なり俱小仙人と迎へありて礼と作さんと
 一ひと阿私陀急に推止めつ太子の三界の至尊ありとて其
 軀恭しく合掌し太子の足と礼拜をせば王も夫人も淨心小硬き
 ろひつ猶も亦預へる觀相して將來の禍福善惡を示しつと命
 小ぞ神必形を結し太子と熟相し志を忽然悲泣し生まむ

王も夫人も驚憂ひ太子小何の正祥ありては泣悲しむと同
 つて阿私陀燈を照し愛とよ正祥の在りまき相好具足ありあり
 寔小天人のごく不在せり抑二十二相皆其處を得て亦復
 明小願を一人の必一切種智と成る太子遠相爾なりねば悉て
 正覺を成しありて天人を濟度しありべき小恨らくの老朽の奉
 百有二十下速びぬ久しうく終に命終り無相天ふけむべしれは
 佛興と親奉らむ經法と聞まらむ遠故小悲むのそ故て不若
 ありひそすとて正覺と親小淨版王の奉り候び羊の辱ひ浩了好相の
 福ありて正覺と成るがごとく轉輪王位を踐て後出家成道を
 べたありと亦同あり小阿私陀仙の天機漏るべしと昔て再び
 難を起忽然と獲りぬる雲も勝て虚空に昇り彼方遠小あるぬ
 周小の老て死さると仙の仙の僊之遷て山小入故小を割

とる人下しく山不傍ふと新名不見えらり。然まども阿私
陀父自命終の由を悟る。緯ハ瑞應記にあり。仙といくども世の
人あまは。壽の涯あり。の終天地の長ありけるも。十二萬九千六
百奉と一えとて一回終る。凡物くして終る。理ハわさきま

十四

ち子諸藝通曉并提婆佛法と妨る。始
再就阿私陀仙人。ち子の相好を先示して。死去一限不津阪王ハ
情思惟あり。一切種智と成して。天人を降度せんと。いふが如き。出家の
相明ふ。敬する。あぞわんごんごん。加以昔摩耶が。夢想の占ふ。相師們
父白象右の脇より入と夢くれ。二界不極盡き。尊子り。をさ
千萬の衆と度脱せん。記一志と思ひ合さる。未生以前より自然
樂懸厭離の心あり。歎。遮莫速不。出家得道の志と記し。もせ
別不世嗣ありと。奈何せん。たわも右も。必塵の心と。生さぬ。如と

あ。と。情曇。殊夫人。子も。緯の心を示し。ぬひて。迦毘羅城一還淨一
ぬひ。より。容貌端麗。き未通女と。五千人。擁ひ。ち子の侍女とて
且暮不。秋舞吹彈して。ち子の心を慰めさせぬ。是との娛樂と
りて。厭離の心を覆させし。の。脅慮ありと。茲不。釋種の子。氏。族あり
忍天と。喚。彼を者あり。善兵法。技不長。二十九種。の
善巧。妙術を有ち。當時。双ぶ。若も。を。武道の達人あり。は。ち子の
師。親不。命。ひて。四方一。里。除あり。園と。造りて。勤。勉と。号。け。高。僧の
端不。備。けり。余。ま。バ。勤。勉。園。の。鳥。陀。夷。を。と。め。自。除。の。扈。從。們。ち。子
不。傳。き。俱。不。及。道。と。學。ぶ。復。不。五。百。の。釋。種。の。子。も。悉。く
貴。子。と。も。遠。知。不。集。合。て。共。侶。不。而。て。學。び。習。ふ。中。も。月。と。會。ね。奉。と
積。つ。熟。不。熟。不。一。般。あり。一。々。獨。處。多。ち。子。の。も。四。年。の。間。不。忍。天。が。秘
術。と。悉。く。得。ぬ。ひ。て。通。達。せ。ざる。技。も。あ。く。神。力。も。亦。無。双。不。在。せ。た。大。家

發す怖り。一日諸童子別堂不。雁を成して射術を學び半の遊戯
了す。一羽の雁空高く飛行を危と睨仰て。提婆達多はらふ
箭列ひより引強と發つ一箭。一羽の雁を射着し。残るはた
發りて。翠天遙み飛去ぬ。射らる雁ハ箭を帶て。同際遠く不在
し。子の前へ墮てんげり。遠為体不患多。子ハ憐みあひて。併の
雁を自ら墮し安む。箭を抜ゆ。傷を融蜜もて刺す。しゆひ
回せ。ためと思ふ。処提婆ハ從者と引連て。子ハ還一。拔き寄
す。方僅那方。小可が射て落し。雁ある不。遞與し。ぬくと
り。良と。子ハ緩み見く。りぬひて。海に奉事ハ感ト。なり。那まで
比類あた。射術を他不示し。去らる雁ハ用ハ盡く。る。丸不。よ。よ
宣く。提婆ハ首とら。揮て。借使。子ハ所望ありとも。も。柄。那で
懷らんや。將歸て肉と啖らん。返しぬ。と。焦燥ども。子ハ猶。空。玉

たむ。生を害して。樂しむ。畜生殘害の類不。して。人萬物の靈。了
者。自慚愧て。戒めさ。らんや。禽獸も。夫。埒。親子の情。ある。故。不。死。を
畏る。死を恐る。故。不。人。小。列。深。ま。む。若。人。迫。よ。ま。速。く。起。是。命
を。惜。め。あり。務。不。及。哺。乳。不。二。枝。殊。不。雁。ハ。四。德。の。有。る。遊。戯。不
命。を。新。べ。う。し。海。に。射。て。丸。を。還。不。墮。し。も。是。因。縁。あり。生。不。回
し。て。去。さ。ぬ。歎。む。遮。莫。命。教。茲。不。盡。て。回。死。む。ハ。返。さん。の。こと。宣
ひ。つ。傷。瘡。雁。の。兩。翼。を。玉。の。堂。り。て。二。三。回。極。あ。つ。バ。併。の。雁。ら
忽。然。と。甦。て。あ。ん。膝。と。下。り。つ。子。不。ら。ち。對。ひ。完。も。礼。拜。さ。す
し。く。不。五。六。步。還。巡。し。つ。一。聲。啼。て。翼。を。開。き。翠。天。へ。高。く
を。飛。去。ける。遠。光。景。と。見。る。者。所。く。若。且。狭。き。且。感。ト。て。子
の。仁。慈。願。徳。を。嘆。賞。せ。さ。す。も。每。う。り。く。射。術。の。奉。事。を。願
し。つ。提。婆。達。多。ハ。却。不。面。目。と。失。あ。ひ。し。心。地。せ。く。ま。て。頰。腫。じ。

要^{えん}ち^ちた^た画^む屏^{びん}骨^{こつ}折^せり^りと^と謚^{ふや}き^きる^るぐ^ぐ從^む者^さを^を將^{しやう}て^て勤^{きん}劬^{くわん}園^{えん}を^を
 還^ま出^でし^しけ^けり^り是^{こゝ}佛^{ぶつ}法^{ぽう}を^を妨^{さまた}げ^げし^し怨^{うら}讎^{しん}を^を結^{むす}ぶ^ぶ最^{さい}初^{しゆ}あり^り遠^{とほ}後^ご射^{しや}
 洲^{しゆ}の^の勝^{かち}劣^{せつ}箭^{せん}の^の井^いの^の故^こ事^じ相^あ撲^まの^の負^ま勝^{かち}象^{しやう}墮^だ坑^{けい}の^の舊^{きゆう}蹟^{せき}と^と殘^{のこ}
 ち^ちあ^あん^んど^どた^た子^しの^の智^ち力^{りき}不^ふ及^じハ^ハさ^さる^るを^を提^{だい}婆^ぱが^が猜^{そね}と^と懐^{わきま}る^る擇^{たく}の^の
 義^ぎハ^ハ宗^{しゆ}門^{もん}紀^き立^たし^し保^{たも}ち^ちる^る是^{こゝ}バ^バ省^{せう}畧^{りやく}一^{いつ}つ

八宗記系釋迦實錄卷之二畢



